

セーリング競技の競技継続状況

The present condition of continuation in athletic sailing

1K10C446-1 山口祥世

主査 中村好男先生

副査 塩田琴美 先生

【背景】

海洋国日本で、セーリングは海のスポーツとして重要な位置にある。セーリングは競技スポーツでもあり、年齢や性別に関わらず誰もが楽しめる生涯スポーツでもある。自然を相手とするスポーツのため勇気や忍耐力、チームワークなど様々なことを学ぶことができる。財団法人日本セーリング連盟（JSAF）は基本方針として普及・文化・勝利の3つを掲げている。全国各地でボランティア活動を通して、ジュニアからシニアまで多くの人がセーリングを楽しむ機会と場をつくり普及に尽力している。また、会員増強と財政基盤の強化を柱として全国的な拡大を目指している。

しかし、平成13年度から平成23年度までの10年間のJSAF会員メンバー登録数の推移を見てみると、少しずつであるが競技者が減少している。現状では生涯スポーツの代表的な存在であるテニスや水泳のように身近な競技とは言えない。また、現在競技者として競技をしている人の中でも、ヨット競技を卒業や引っ越しなど環境の変化とともに引退しまう人も多いため、競技人口も減少している。平成13年度と平成23年度の登録数を比較すると1843名の減少だ。セーリングの普及はもちろん、日本の競技力向上のためにも競技人口増強はセーリング界に必要不可欠な問題となっている。

【目的】

年々、セーリング競技者は減少しており、生涯スポーツとしても認知度が低い。ヨットの魅力を多くの方に知ってもらい海外のように身近なものに感じてもらうことや競技人口を増やすことで日本の競技力のレベルアップを望みたいと考えた。また、ヨットの需要を増やすことで競技継続しやすい環境の改善に繋がる。

より多くの方がヨット競技に関わることができるようヨット競技の環境に関する問題点はなにか、また現在セーリング競技を行っている人が競技をやめてしまう要因は何か調査し、続けるためには何が必要であるか、改善すべきポイントを調査したい。

【方法】

早稲田大学、同志社大学、明治大学、成蹊大学、横浜国立大学の現役ヨット部員32名に質問紙を配布し、任意でアンケート調査を行った。回答して頂いた項目を比較し、セーリング競技をやめてしまう要因に共通点がないか調査する。また、SPSSを用いて比較分析も行う。

【結果・考察】

アンケートを集計し、現役選手の大学引退後の競技継続意思やセーリング競技への想いを調査した。調査対象者全員がセーリング競技を「好き」とであると回答した。競技継続意思では、「続けない」と答えた人は20%、「続けたい」「未定」と答えた人は80%であった。よって多くの人が「続けたい」と思いながらも様々な壁があり続けられない環境に置かれている。この調査を始める前は、ヨットを始めたきっかけや競技成績も競技継続意思に関係するのではないかと考えていたが、そこで大きな差は出ず、ヨットを今後続けるかどうか「未定」と答えた人の多くが、「金銭的問題」を理由に競技継続が不可能になっていることが分かった。次いで「ペアの問題」「艇の整備の問題」が上がった。物を使うスポーツであり、コンビネーションが重要なスポーツなのでこの2つはとても重要な問題である。

【今後の展望】

今回のアンケート調査でヨット競技の競技人口を増やしていくためにはヨット競技を身近なものに感じることのできる環境づくりが重要であると感じた。今の競技者数で艇のレンタルを増やしたり低価格でヨットに関わることは難しい。よってヨットの需要を増やしていくことが重要だ。まずは、ヨットを知ってもらう機会としてヨット教室などのイベント強化が必要である。また、好奇心旺盛で海への恐怖心も少ない子供たちを対象としたヨット教室は効果的であると思う。そして、海外のようにヨットハーバー、クラブの普及に力を入れ一般の方も入りやすい雰囲気作りも普及には必要ではないかと思う。レンタルボートの増加や選手のための船だけでなく、一般の方が乗っても楽しめる艇種を貸し出す必要がある。